

## Works Review のこれまでを振り返りつつ Vol. 13 に寄せて



有田 伸  
Works Review 編集委員  
東京大学社会科学研究所  
教授

Works Review が創刊されたのは2006年。創刊号の巻頭言で、編集委員長の矢野眞和先生は、本誌の意義として次の点を強調された。知識生産の重要な役割をそれぞれ担っている大学と実業界の間の距離を縮め、互いに真摯に学び合っていくための場を築いていくこと。そのために本誌の掲載論文も、まずは研究論文としての作法をきちんと守り、学術論文としてのクオリティを保つこと。その上でさらに、実務の視点や経験を生かし、大学人にはなかなか気づけない知見や実務に役立つインプリケーションを導き出していくこと。今私たちが見ても、本誌がチャレンジしていく課題として、これらの重要性はまったく色あせていないように感じられる。

それから10余年、これら当初の課題を本誌はどれだけ達成できたのだろうか。正直に言って、その判断は新米編集委員である私には荷が重すぎるが、本号の巻頭言を担当させていただいたのも何かのご縁である。本号掲載論文の紹介も行いつつ、私なりの印象を綴ってみたい。

まず本号に関して印象深いのは、掲載された

9本のうち5本の論文が、2016年からリクルートワークス研究所が実施している「全国就業実態パネル調査」のデータを分析している点である。1年前には就業を希望しない非労働力であったにもかかわらず、翌年には職に就いている就業者が存外に多いことを示し、彼ら／彼女らの属性や、就業へと至った要因を考察した萩原論文や、自己啓発を行うことが正規雇用者の賃金にどのような影響を、なぜ与えるのかを検討した坂本論文のように、同一の就業者（あるいは非就業者）の時点間の変化を追うことではじめてアプローチできる興味深い問題は多い。

また固定効果ロジットモデル等を通じて、いかなる要因が就業者の自己啓発の実施を導くのかを検証した孫論文や、固定効果モデルによって、妻の就業が配偶者である夫の転職意向や実際の転職行動に与える影響を検討した大嶋論文のように、個人間の観察されない異質性まで統制した分析が行えることも、パネルデータ分析の大きな利点である。

このほか、初職における「起業」の選択が、所得や仕事満足度など、その後のキャリアにどう影響するのかを分析した古屋論文も、やはり

初職での起業選択者が数百名に達する程度に全体サンプルが大きい(有効回収数が毎年5万前後), という本調査の利点を生かしたものである。このように, 就業の問題に特化した大規模パネル調査のデータを得たことで, 本誌論文が扱える問題の幅は大きく広がった。またパネルデータの分析に伴って, 各論文の分析手法が精緻化していることも見逃せない変化である。

もちろん, これ以外のデータをもちいた論文でも, それぞれ, 自らの問題関心に即した興味深い分析が行われている。津田論文は, 管理職を対象とした「マネジメント行動に関する調査」のデータ分析を通じ, 管理職による部下へのジョブ・アサインメントが, チームの業績向上に肯定的な効果を持つことを実証的に示す。また城倉論文は, 働き方改革が進む中で注目を集めているテレワークが, 実際どの程度浸透しており, またその浸透を促す要因は何であるのかを, 「Works 人材マネジメント調査 2017」データの分析と事例研究を通じて明らかにしている。さらに辰巳論文は, 高校における進路指導がキャリア教育への転換を迫られる中で, その内容がどのように変化してきたのか, またその変化には学校特性によってどのような違いがあるのかを, 「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」の複数時点のデータを通じて考察している。

本号で唯一, 質的分析を主な手法とした豊田論文は, ゼミ活動の評価が高い23名の大学教員へのインタビュー調査を通じて, そもそもゼミとはどのような学修ゴールと教育行動によって構成されているのかを明らかにする。ゼミは多くの大学において重要な教育活動となっているものの, その進め方についての明示的な議論は必ずしも多くはなく, 精力的なインタビューに基づく本稿の意義は大きい。

以上をふまえ, 冒頭の問題に戻ろう。やや身

びいき(?) かもしれないが, 学術論文の執筆経験が少ない研究者も多い中, 「研究論文の作法にきちんと従った論文を書く」という当初の課題は概して良く達成できているのではないだろうか。もちろんこれは, 研究者皆様のご努力と, これまでの編集委員の方々のご厳しくも温かいご指導の賜物だろう。また全国就業実態パネル調査を初め, リクルートワークス研究所の貴重な調査データを分析できていることも, 学術論文としての価値の向上に大きく貢献しているだろう。

一方, 「大学人にはなかなか書けない論文を書く」という課題は, もちろんかなりの程度達成できてはいるものの, 個人的には, さらに積極的に追求していく余地があるように感じている。こと「仕事」に関する領域には, 十分な現場感覚を持ってこそ可能となる研究が実に多い。計量分析を行う場合であっても, 実務の現場に通じているからこそその問題設定や結果の解釈, さらに実際の事例検討を通じたメカニズム特定の試みなど, 大学人とは異なる視点からのユニークな分析は十分に可能であろうし, 逆にそのようなユニークさに, 大学人の側は大きな期待を抱いているようにも思われる。

以上はあくまで一編集委員としてのやや乱暴な評価と意見であるが, 本誌の転機に際し, 今後「互いの真摯な学び合い」がさらに進展していくことを願って, 敢えて披瀝させていただいた。

これまでの成果を礎として新しい課題にチャレンジすべく, 本誌は次号より装いも新たに再出発する(詳細は次号をお楽しみに...)。もちろん研究所員による学術論文執筆は引き続き行われ, その成果はウェブ上で随時公開されることになる。今後の Works Review, ならびにリクルートワークス研究所の研究活動に対して, より一層のご愛顧を賜れば幸いである。